



E n g a g e

あずま渡里



Engage

あずま渡里

始まり

— 虎徹視点 —

「オリエンタルタウンには昔、通い婚って風習があったそうですね」

仕事の後、虎徹の部屋で飲んでいると。

不意にバーナビーがそんな事を言い出したのに、虎徹は琥珀色の瞳を驚きに見開かせた。

「よく知ってるな。でも、もう何百年も前だぞ？」

「折紙先輩に聞きました」

「あー……」

「素晴らしい風習なのに、廃れたなんて勿体ない」

「……バーナビーちゃん？」

話の出所は納得出来たが、何故、バーナビーがここまで食い付いてるのが解らない。首を傾げた虎徹の視線の先で、バーナビーが口を開く。

「結婚って紙一枚で縛られて、他人とずっと一緒に暮らして……窮屈じゃないですか」

「はあっ!？」

真顔で、とんでもない事を言い出した相手に驚く。そんな虎徹に構わず、バーナビーの言葉は更に続いた。

「ただ独身だと、半人前扱いされるし……だから週末婚がしたいって言ったら、お前は愛人になりたいのかって勘違いされて」

「ちよっ! バーナビーちゃん、それ誰に言っちゃったの!？」

「マーベリックさんです」

「っだ！」

下手な相手ではなくて良かったと言うべきか、保護者に何を相談しているのかと突っ込むべきか。

(箱入り息子って言うか、世間知らずって言うか)

どちらも同じような意味だがそこはこの際、問題ではない。

問題なのは、この完全無欠な『シユテルンビルトの王子様』の結婚観が随分と歪んでいる事だ。

(結婚つてもっと、良いモンなんだけどな)

伊達に経験者な訳ではない。そして頭でっかちではあるけれど、真っ直で綺麗で可愛いこの青年には幸せになつて欲しい。

そんな訳で虎徹は拳を握り、結婚の良さを語って聞かせる事にした。

「朝、目が覚めたら好きな相手に会える！」

「必要ありません」

「美味しいご飯を作ってくれる！」

「女性全員が、料理上手な訳じゃないでしょう？ 別に、デリでも困らないですし」

「そつ……掃除洗濯！」

「虎徹さん、それは奥さんじゃなくハウスキーパーさんでは？」

「っだ！ か、帰ったらお帰りつて迎えてくれるっ」

「疲れてる時だと、逆に鬱陶しいです」

身も蓋もない切り返しに、虎徹は頭を抱えた。何とか、バーナビーに伝わるように——そこまで考えたところ

で、パツと虎徹に顔を上げる。

「そうだよ！ 俺とはこうして飲み食いしたり、泊まつたりしてるじゃんか。大丈夫、案ずるより産むが易し!!」
「……解りました」

そう言うてどうだ、と笑顔になった虎徹に真顔のバーナビーが頷く。

やっとなんてくれたか、と安心して虎徹は焼酎のグラスを傾け、話はこれで終わった——と思ったのだが。

「結婚して下さい、虎徹さん」

「……何で……?」

週末、記載済みの婚姻届と指輪を手にとって来たバーナビーに、虎徹は呆然とした。

―バーナビー視点―

「オリエンタルタウンには昔、通い婚って風習があったそうですね」

仕事の後、虎徹の部屋で飲んでいて。

ふとバーナビーが思い出した事を口にする、虎徹が琥珀色の瞳を大きく見開いた。

「よく知ってるな。でも、もう何百年も前だぞ？」

「折紙先輩に聞きました」

「あー……」

「素晴らしい風習なのに、廃れたなんて勿体ない」

「……バーニーちゃん？」

続けた言葉に、虎徹が今度は首を傾げる。表情同様、クルクルコロコロ変わる仕種を微笑ましく思いながら、バーナビーは話を続けた。

「結婚って紙一枚で縛られて、他人とずっと一緒に暮らして……窮屈じゃないですか」

「はあっ!？」

途端に虎徹が驚きの声を上げるが、まあ、予想の範囲内だ。

そんな虎徹に構わず、バーナビーは更に話を続けた。

「ただ独身だと、半人前扱いされるし……だから週末婚がしたいって言ったら、お前は愛人になりたいのかって勘違いされて」

「ちよっ! バーニーちゃん、それ誰に言っちゃったの!？」

「マーベリックさんです」

「っだ！」

流石に、誰彼構わずする話ではないとは解っているが、虎徹は生真面目に心配し頭を抱えている。マーベリックの、苦笑しつつ流した反応とは真逆だ。

(性格もだけど、これが既婚者と独身との違いなのかな……いや、この人だからだな)

両親を殺した相手を探していた頃と違い、今では結婚を焦る必要はない。

ないが、未だバーナビーには全く結婚の良さが解らないので、虎徹に尋ねてみる事にしたのだ。

(さあ、どうやって僕を論破しますか?)

『壊し屋』ワイルドタイガーに、価値観を壊される事は嫌いではない。

内心、ワクワクしていると虎徹がグツと拳を握って口を開いた。

「朝、目が覚めたら好きな相手に会える！」

「必要ありません」

「美味しいご飯を作ってくれる！」

「女性全員が、料理上手な訳じゃないでしょう？ 別に、デリでも困らないですし」

「そっ……掃除洗濯！」

「虎徹さん、それは奥さんじゃなくハウスキーパーさんでは？」

「っだ！ か、帰ったらお帰りって迎えてくれるっ」

「疲れてる時だと、逆に鬱陶しいです」

上げられた例に駄目出しをすると、虎徹が困り果てたように頭を抱えた。

（いちいち全力投球だな、この人）

その事に素直に感心していると、何かを思いついたのかパツと虎徹が顔を上げた。

「そうだよ！ 俺とはこうして飲み食いしたり、泊まつたりしてるじゃんか。大丈夫、案ずるより産むが易し!!」

そして意気揚々と言われた内容に、バーナビーは翡翠色の瞳を軽く見張った。

（確かに、虎徹さんとなら一緒にいても嫌じゃない）

そう考えると先程、虎徹が上げた例もまるで意味が変わってくる。

（朝、虎徹さんが「おはよう」って笑ってくれて……料理も結構、上手いんだよなこの人……掃除洗濯は、共働きだから僕が負担してもいい……お迎えは無理かもだけど一緒に帰って、頭撫でてくれたりとか……）

「……解りました」

前言撤回、結婚最高。

頷いたバーナビーに安心したのか虎徹が笑みを深め、優しい眼差しで見つめてくる。

（明日、婚姻届と指輪を用意しよう）

その事を心地好く感じながら、バーナビーはそう決意した。

通じない

— 虎徹視点 —

「あのなあ、バニーちゃん？ 確かに俺は、結婚についてはガッツリお勧めしたけどよお」

唐突にプロポーズをしに来た相棒を部屋に上げて、こめかみを押さえながら虎徹はそう言った。

そう、あくまでも『結婚』についてであり、虎徹込みでお勧めなんてしていない。

「だけど、あなたも言ったじゃないですか。あなたとは、一緒にいても平気だつて」

「いやいやいや、そりゃあバディだからだろ!? そもそも結婚つてのは、好きな者同士がするものであつてだな」

「僕は、虎徹さんが好きです」

「……っだ！ 好きの意味が、違うっつの！ お前の言うおじさん、つまりは中年男性とキスとかそれ以上とか、出来ねえだろうが目え覚ませっ！」

真剣な表情でバーナビーから好きだと言われたのに、心臓が跳ねたが——それはときめいたと言うよりも、単純な驚きだ。何しろ、バディを組んだ当初との高低差があり過ぎる。

(そりゃあ、まあ、嫌われるよりは好かれる方が良いけどよ……何でこいつ、極端から極端に走るんだか)

耳キーンつてなるわ、といつかテレビで聞いたような事を思っていると、しばし黙っていたバーナビーが顔を上げた。

「解りました」

「そ、そっか」

「僕とした事が、順番を間違えてました」

そう言ったバーナビーの手が、虎徹の肩へと置かれる。

(そうそう、ま、俺なんかで勘違いするなら案外、すぐ結婚出来そうだな)

そして、そんな風に納得した虎徹に綺麗に整った顔を近付けてきたかと思うと——思わず見惚れた虎徹の唇を、柔らかいもので塞いできた。

「好きです……まずは、キチンとお付き合いからですよね？」

「……解ってねえだろうがっ！」

呆然とした虎徹を我に返したのは、解ったと言いつつもやはり色々とすつ飛ばしてるバーナビーの言葉だった。

―バーナビー視点―

「あのなあ、バニーちゃん？ 確かに俺は、結婚についてはガツツリお勧めしたけどよお」

プロポーズをする為にやって来たバーナビーを部屋に上げ、こめかみを押さえながら虎徹が言う。

確かに、逃げられては困るので秘密裏に事を運んだが――もう少し、事前にアプローチをするべきだっただろうか？

「だけど、あなたも言ったじゃないですか。あなたとは、一緒にいても平気だって」

「いやいやいや、そりゃあバディだからだろ!? そもそも結婚つてのは、好きな者同士がするものであってだな」
「僕は、虎徹さんが好きです」

「……っだ！ 好きの意味が、違うっつの！ お前の言うおじさん、つまりは中年男性とキスとかそれ以上とか、出来ねえだろうが目え覚ませっ！」

困った、会話が成立しない。

虎徹の言いたい事は勿論、理解出来ているのだが――どうも虎徹は、バーナビーの事を保護者目線で見ている節がある。それはそれで心地好いが、こう言う時は面倒だ。

(別に僕は、子供でも天使でも聖人君子でもないのに)

仕方ない、とこっさりため息を吐いてバーナビーは顔を上げた。

「解りました」

「そ、そっか」

「僕とした事が、順番を間違えてました」

そうやって、バーナビーは虎徹の肩へと手を置いた。

(ああ、もうそんな安心した顔で笑って……可愛いな)

それから、無防備な虎徹へと顔を近付けて——バーナビーはその唇を、自分の唇で塞いだ。

「好きです……まずは、キチンとお付き合いからですよね？」

「……解ってねえだろうがっ！」

怒鳴ってはいるが、殴られたり吐かれたりはしていない。つまりは虎徹も、同性であるバーナビーとキス出来るのだ。

(良かった、嫌われてない)

その事に内心、安堵しつつバーナビーは次の攻略法を考える事にした。

Engage

発行日 2022年10月7日

著者 あずま渡里

<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
